中世百首歌

二

井上宗雄
田村柳壱
編

古典文庫

井上宗雄
田村柳壱
編

中世百首歌

二

古典文庫

古典文庫第四四四冊

昭和五十八年九月二十日印刷発行　　非売品

中世百首歌
二

編者　井上宗雄
　　田村柳壱

発行者　吉田幸一

印刷者　共立印刷株式会社

発行所　114　東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二七一一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO 1983. Printed in Japan

目次

一　道家詠草百首……七
二　中院一夜百首（藤原為家）……一九
三　後鳥羽院御製百首（第一類本）……三七
四　百首和歌号遠嶋百首（第二類本）……四九
五　遠嶋百首（第三類本。付注本）……六一
六　後鳥羽院御百首抄（第四類本。付注本）……八五
七　詠百首和謌（中臣祐茂）……一三五
八　詠百首応制和謌（西園寺実兼）……一四三

九　〔後二条院百首〕……一五五
一〇　夏日同詠百首応製和謌（鷹司冬平）……一七一
一一　詠百首和哥（津守国道）……一八三
一二　夢窓国師詠歌百首……二〇一
解　題……二一一
初句索引……二五九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

凡　例

一、「中世百首和歌」は次の要領によって翻刻刊行する。

(1) 平安末期から江戸ごく初期（慶長頃）までの個人百首を原則とする。

(2) 比較的披見・入手しやすい左記叢書所収のものを除く。

群書類従（正続）　私家集大成

但し右所収の百首でも、異本関係にあるもの、また右所収の百首が必ずしも善本でなく、他に善本（原本・古写本等）の類がある場合は収める。

(3) ある契機によって複数歌人がそれぞれ百首歌を詠じ、それが一括されて定数歌集となっている場合（例えば正治百首・嘉元百首の類、或は着到歌会歌集など）、また形態的に百首歌でないもの（例えば個人百首を基にして成立した千五百番歌合など）は除くが、その中の個人百首が独立した伝本として存し、かつそれが善本・異本（原本・草稿本・完成本の類）であるような場合は収める。

(4) 定数歌が私家集の一部であるもの（私家集の、ある部分が部類で、その中途や前後に百首があるものなど。例えば明日香井和歌集・拾遺愚草など）は除くが、百首歌が集積されて家集となっている場合で、(2)に未収のものは収める。

(5) 偽書・仮托と目せられる百首（例えば鷹百首の類）は、その伝承作者のものとしては扱わず、中世成立の分明なものについては、別途に将来の課題として考え、ここでは一応除いておく。

(6) 以下、同じ流派の人々や、ほぼ同時期の百首をまとめて一冊として刊行する。本冊には主として鎌倉期のものを収めた。

二、翻刻は次の方針で行った。

(1) 漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名などはすべて底本のままとしたが、漢字は原則として現行新字体に、変体仮名は通行の字体に改めた。

(2) 私注はすべて（　）に入れて示した。

(3) 「夢窓国師詠歌百首」は純粋な個人百首ではない可能性も濃いが、研究

の一資料を提供するという意図で加えた。

(4) 十二の百首歌を、ほぼ成立順に配列し（但し後鳥羽院のそれは一～四類本の順とした）、一つの百首歌ごとに漢数字で番号を与え、それぞれに歌番号を算用数字で施した。

(5) 「道家詠草百首」は書陵部本を、為家の「中院一夜百首」は宮城県図書館本を、後鳥羽院のいわゆる遠島百首の四種は宮内庁書陵部本（二本）・高松宮本および田村柳壱蔵本を、祐茂の「詠百首和謌」は某家蔵本を、実兼の「詠百首応制和謌」は尊経閣本を、「〔後二条院百首〕」は国立公文書館本を、冬平の「夏日同詠百首応製和謌」は書陵部本を、国道の「詠百首和哥」は成城大学図書館本を、「夢窓国師詠歌百首」は高松宮本を底本とした。翻刻を許された宮内庁書陵部・国立公文書館・成城大学図書館・尊経閣文庫・高松宮・某家・宮城県図書館に厚く御礼申上げる。また翻刻に当たって、種々御教示・御便宜を添くした有吉保・飯田瑞穂・伊藤博之・太田晶二郎・中西進・橋本不美男・古谷稔の諸氏並びに上

記図書館の職員の方々に深謝の意を表したい。

(6) 本書の性質上、校異を詳しく加えることはしなかったが、底本の不備・誤脱および他本によって大きく意味が変る所に限り、他に校合すべき伝本のある場合は、それによって校異を加えた。校合に用いた本、校異のつけ方は、それぞれの解題を参照されたい。

三、解題は基本的な事項に止めた。

四、初句索引を添えた。その際、中古式歴史仮名遣いに統一し、初句が同じ場合は第二句まで掲げた。所在は、定数歌番号（漢数字）・歌番号（算用数字）によって示した。

昭和五十七年十二月

井上宗雄

田村柳壱

一　道家詠草百首

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

冬日詠百首應　製和哥

右大臣正二位兼左近衛大将臣藤原朝臣道家

春廿首

1 よしのかはしらゆふ花のおちたきつ浪もかすみてはるはきにけり
2 しきしまやはつせのひはら雪のうちにをのかいろとやはるをまつらん
3 をとはやまたきのみなかみ雪きえてあさひにいつるみつのしらなみ
4 ほの〳〵とあかしのとよりみわたせはやまとしまやまかすみたなひく
5 けふとてやあさなつむらんゆきのこるさはのたまみつそてにかけつゝ
6 かすみしくおきのやけはらふみわけてたかためはるのわかなつむらん
7 かすかのゝゆきまもへいつるはつくさのときはのいろにはるかせそふく
8 うちきらしなを風さむしいそのかみふるのやまへのはるのあはゆき
9 たかそてにひまもとめつゝたますたれ風をたよりにほふむめかえ

10 鶯のぬふてふかさのむめかえにいとよりかけてはるさめそふる
11 あさみとりこのかはやなきいなむしろしくやかすみそなみにうつろふ
12 かり人のあたちのはらのしらまゆみをしてはるさめいくかふるらん
13 よしのかはいはもとさくらめもはるになみにたちそふ花のおもかけ
14 山かせのかすみのころもふきかへしうらめつらしき花のいろかな
15 わけきつるふかき心のいろをみよはるはよしのゝ花そめのそて
16 たらちねのおやのいさめもたえしより花になかめのはるそへにける
17 ふるさとのもとあらのさくらふく風のうつろふいろにたれならへとて
18 たかさこのはるの山もりとかむなよけふきてかへる花のにしきを
19 やま風のいろふきかへすさくらたのなはしろみつを花にせきつゝ
20 たちかへるはるのいろとはうらむともあすやかたみのいけのふちなみ

夏十五首

21 うくひすのかへる山へのをそさくらはるにをくれしみのたくひかは

22 花にあかぬなかめせしまにふるさとののきのしたくさしけりあひけり
23 やすらはてねなましかはなほとゝきすかたふく月にひとこゑそする
24 あやめふくさつきのけふのほとゝきすなきてうつろふのきのたち花
25 ほとゝきすたゝひとこゑをちきりけりくるれはあくるなつのよの月
26 しのふとははなたちはなの名なりけりむかしをおもふおなしのきはに
27 ともしするしかのとたちもあらはれてはやまかみねにいつる月かけ
28 たつたみもいつみのそまにひかすへてみやきなかひくさみたれのころ
29 ゆふたちのふるかはのへのふかみとりぬれてすゝしきふたもとのすき
30 ゆきしまやいはほなてしこみつこえてやとる月さへうつろひにけり
31 夏のいけのみきはにともすかゝり火のひかりもすゝしゆふやみのそら
32 なつの月さすやをかへのたまさゝのみしかきよはにあかぬころかな
33 たけかこふしつかかきねのつゆのまにひとよをちきるゆふかほの花
34 さよふかきのきはのくさにつゆおちて秋をかけたるうたゝねのゆめ
35 ゆふされはすゝきおしなみふく風にほにはいてねと秋そきこゆる

秋廿首

36 ねやのうちのあふきもけさのしらつゆもをきあへぬほとに秋はきにけり

37 けさはまたくさはのたまもかすそひてつゆふきむすふ秋のはつ風

38 あまの川くもゐをわたる秋風にゆきあひをまつかさゝきのはし

39 いつもきくおきふく風のそれなからなを人からや秋のゆふくれ

40 たかまとのゝちのくすはら風ふけは秋をうつらのうらみてそなく

41 はつかりのなみたやそゝく朝露になをいろまさるまのゝはき原

42 たちまよふきりのまかきにむすほゝれまたつゆほさぬあさかほの花

43 ぬれころもほすまをしかのつまこひになみたはよその袖にかけつゝ

44 すきいたもてふけるいたまの月かけにまためもあはぬ秋のよな〳〵

45 山のはにまてかしまきのとはかりもいさよふ月そ袖をとひける

46 くさのはらつゆのやとりもあるものをにしのみ秋と月のゆくらん

47 をきまよふしのゝはくさのつゆのうへによそへて月のさへわたるかな

48 野もやまもうつろふ月のいろなれはなみのはなにもしもはをきけり
49 あしひきのあらしやよもにさそふらんとをき山へにころもうつこゑ
50 秋の日のひかりもうすきゆふ露にうつろひそむるしらきくの花
51 我かとのいつもとやなきしくれつゝあへすうつろふ秋はきにけり
52 露しくれうはけにはらふみつとりのあをはの山もいろにいてつゝ
53 秋とたにそめぬみとりのいろなからなにこからしのまきのしたつゆ
54 ゆふしくれはれてもをのかいろなれはつゆもろともにふるこのはかな
55 神無月あすか河風そてさむしくれゆく秋をふきはかへさて

冬十五首

56 かりにこし人めもかれてやましろのふしみのをたにをけるはつしも
57 あらちやまみねのあはゆきふるまゝにやたのゝあさちうちしくれつゝ
58 いはたゝくたきつかはなみをとさえてたにの心やよさむなるらん
59 たのめをきしふるさと人のあともなくふかきこのはのしものしたみち

60 秋のいろのあらしにおろすくれなゐをこほりにそむるたつたかはかな

61 たひころもたかしたひもをゆふはかはとけてしくよのこほりしくらん

62 みかさやま月まちいてゝさほかはのきよきかはらになく千鳥かな

63 いけにすむかものはかひにおくしものむすほゝれたるとこの月かけ

64 あらしふくしもよの月の松のはにつもらぬゆきもさむきいろかな

65 夢たにもあらしにたえぬ山さとのしはのかれ葉にあられふる也

66 あめにますとよをかひめのをとめこかゆきにそてふるさゆるよのそら

67 さのゝおかこえゆく人のころもてにさむきあさけの雪はふりつゝ

68 秋のよのたまくらなれし月かけのおもかけなからつもるゆきかな

69 くれたけのたまれはたわにふる雪をしたはたえしとふくあらしかな

70 なかめこしはなと月とのかす〳〵にわかみにつもるとしのくれかな

71 冬かれのおはなかもとのくさのなをそれとはかりもしる人そなき

恋十五首

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton